

「いらして」の使用について

On the Increasing Usage of the Honorific Expression *Irashite* in Japanese

坂 本 清 恵
Sakamoto Kiyoe

Recently, the expression Irashitekudasai 'please come' is commonly used in Japanese rather than the correct form Irasshattekudasai. This article examines the reasons why Irasshatte has been transformed into Irashite, how commonly Irashite is used among female college students, and what they mean when they use it, compared with their usage of other honorific expressions. At present, Irassaharu is still considered a verb of the ra-ri-ru-re-ro conjugation, but it is argued here that it may be undergoing restructuring, such that a new verb "Irasu", conjugated sa-si-su-se-so, may appear in the future.

1996年春学期の国語表現で、表記を正すために作成した手紙文例のうち「是非いらっしゃってください」を「いらしてください」や「来てください」などに訂正したものがあつた。表記の誤りではなく、敬語表現の誤りと誤解して訂正したものと思われる。必ずしも表現の誤りと考えたとはいえなくとも、表現としては馴染みのない、少しおかしいということなのであろう。このことは、「いらしてください」や「来てください」が日常的に使っている馴染みのある敬語としてとらえられていることを示すと同時に、「いらっしゃってください」は敬語的には誤りであるという意識に繋がるものであることを示すと思われる。

そこで、訂正のなかで、一番多かった「いらして」を中心に、「いらっしゃって」や他の敬語表現との使用状況・使用意識について調査・考察を行った。

1. 「いらっしゃって」から「いらして」へ

「いらっしゃる」は「いらせらる」からの変化したもので、「おほせらる（一説に「おほせある」）」が「おっしゃる」、「させらる」が「さっしゃる」、「なさせらる」が「なさっ

しゃる」へという、新たな敬語動詞への変化と同様のものである。この変化は、音変化と活用変化とを起こしている。

音変化の理由については、「せ」が〔ʃe〕で後接拍の母音〔a〕との関係から〔ʃa〕になったものであろう。「いらしゃる」「おしゃる」「さしゃる」「なさしゃる」となった後、促音が挿入して「いらっしゃる」「おっしゃる」「さっしゃる」「なさっしゃる」になったと思われる。

活用は「いらせらる」は助動詞「らる」が下二段動詞と同様の活用をするが、「いらっしゃる」は五段動詞相当の活用になっている。

「いらっしゃって」が「いらして」に変化した理由について岸田武夫『国語音韻変化の研究』（武蔵野書院、1984年、420p）は、前接音との関係から/ʃa/が/ʃi/に変化したとする。

シに変化する連音関係を見ると、…シャッタ→…シッタのばあいには、前接する語形が、イカシャッタ（行）・イウシャッタ（言）・サシャッタ（為）のように、四段活用動詞の未然形か、サ行変格活用動詞の未然形「さ」であるために、末尾の音はすべてア列音節であるし、サシャッタ→サシッタ・イラシャッタ→イラシッタの場合は、前接音がサ・ラというア列音節である。したがって/ikaʃaTta/・/saʃaTta/・/iraʃTta/の/ʃa/の母音/-a/は、前接音の/ka/・/sa/・/ra/の母音/-a/との連音関係において、重音脱落(haplology)の原理に基いて、音声的発現にあたってはしばしば消滅し、さきの音韻形式は、〔ikaʃtta〕・〔saʃtta〕・〔iraʃtta〕のような音声的実現をしていたものと思われる。そうして、この〔ʃ〕の音を聞き手が/ʃi/と聞き取ることによって、/ikaʃiTta/・/saʃiTta/・/iraʃiTta/という音韻形式への変化を生ずるに至ったものと思われるのである。

前接音がア列音でないと、このシャ→シの変化が起こらないことに関連して、「おっしゃった(て)」は、「おしゃった(て)」の形はみられても、「おしった(て)」をみることがないとする。

「いらして」は、「いらっしゃって」の、後に促音の続く「しゃ」が前接ア列音と連音関係によって「し」になり、さらに促音を脱落させた語形である。

しかし、「いらっしゃる」は同様の変化が起こった他の語よりも成立が遅いようで、「おしゃる」などは室町時代の文献に例がみられるが、「いらっしゃる」は江戸時代になって現れる。また、「いらして」の前の語形「いらっしゃって」「いらしって」「いらっして」

は、「さっしゃる」からの「さして」や「さっし」と同様に、江戸語での語形であるとみられる。したがって、「いらして」は東京で使われだした語ということになる。

金田一京助『増補国語音韻論』（刀江書院、1935年、316p）には、「いらっしゃい・下さい」の説明に

促音になる時は、いらっしゃった・いらっしゃいません・いらっしゃいました、のように云ふ。促音になる時の、いらっしゃった・いらっしゃって、なども実は都人士の発音には、もっと軽快に、いらしった・いらしって、などになってしまった。

いらっしゃった——いらしった——いらしった

いらっしゃって——いらしって——いらしって

更に進んで、いらした・いらして、だけでも云ふ様である。

とある。「いらした・いらして、だけでも云ふ様」ということは、昭和10年頃は、「いらして」「いらした」はそれほど広く使用されてはいなかったのだろう。

また、辻村敏樹編『敬語の辞典』（角川書店、1991年）の「いらっしゃって（た）」には、「いらして（た）」のほかにも「いらしって」「いらしって」「いらして」の語形を載せている。しかし、現在は、このうち「いらしって」「いらしって」「いらしって」を聞くことがない。明治の東京生まれの落語家のテープではこの変化途中の形を聞くことがあるが、現在は通常、促音が二個所入る「いらっしゃって（た）」とその変化の最終語形「いらして（た）」のみの使用が多い。（注）

2. 「いらして」の使用状況

1993年に、短大生とその父母の方に実施した敬語調査（詳しくは、「短大生とその親の敬語使用について」『埼玉女子短期大学研究紀要』7号、1996年3月）の設問中、次のものに「いらして」の回答を得た。

- ・先生に教室へ来るよう頼むとき。

「先生、教室まで_____。」

下傍線部への回答をまとめると、以下のものであった。動詞部分のみに着目してまとめ、依頼部分の「～ください」「～いただけますか」などの表現については細かい分類を省略した。

この調査では、回答全体でみても「来る」の尊敬表現を「お越し～」「おいで～」とするものが78.3%で多く、「いらっしゃって」13.4%、「いらして」はわずか4.8%にすぎ

ない。ここからは、「いらっしゃって」「いらして」に対する意識や使用差をうかがい知ることにはできない。ただ、年齢を問わず「来て」の尊敬表現に「いらして」を意識的に使用する人が確実にいることは明らかである。

回答例	学生	親	合計
1「お越しく下さい」	141 (48.6%)	58 (36.5%)	199 (44.3%)
2「おいでください」	98 (33.8%)	60 (37.7%)	158 (35.2%)
3「いらっしゃってください」	28 (9.6%)	23 (14.4%)	51 (11.4%)
4「いらしてください」	11 (3.8%)	11 (6.9%)	22 (4.8%)
5「来てください」	7 (2.4%)	6 (3.8%)	13 (2.9%)
6 無回答	5 (1.7%)	1 (0.6%)	6 (1.3%)
のべ合計	290	159	449

さて、稿頭に戻るが、1996年に「いらっしゃって」を「いらして」に訂正を行ったのは、227人中23人、約1割であった。もし、敬語の誤用を正す文例に「いらっしゃって」が含まれていたら、どの程度の学生が「いらして」に訂正するのだろうか。また、1993年の調査よりも、徐々に「いらして」が「いらっしゃって」よりも若者に指示されるようになったのだろうか。

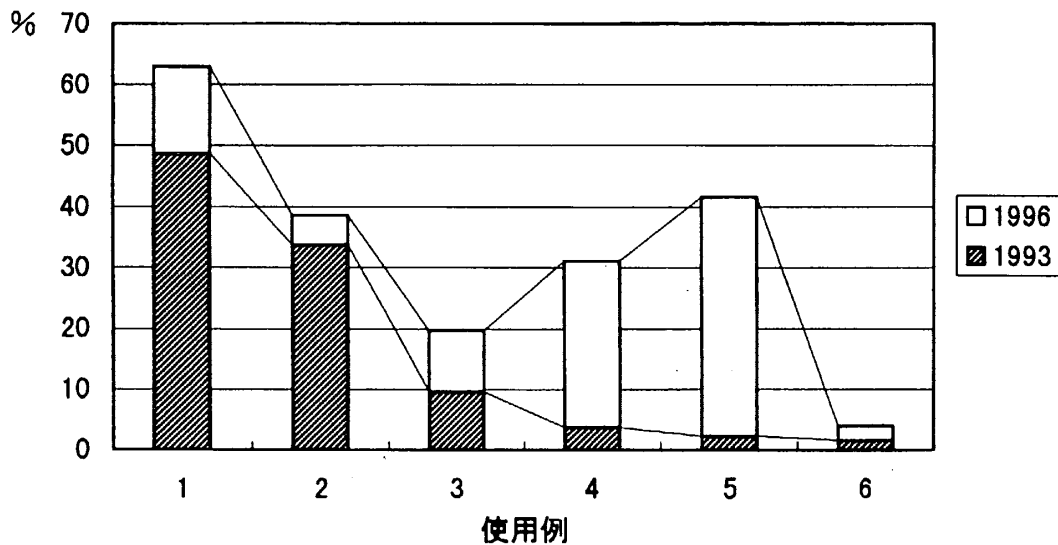
1996年10月に目白学園女子短期大学の国語国文学科の学生を対象に敬語調査を行った中から、「いらして」の使用状態をみる。埼玉女子短期大学と目白学園女子短期大学では、学生の出身にわずかな違いがある。前者は、埼玉と東京の多摩地区からが多く、後者は、東京・埼玉・千葉・茨城などやや広い範囲に及ぶ。

「明日、家まで来てくれ」を普段使っている敬語表現（目上の人に対して使うとして）に改めるというものに対して、次のような回答をえた。

回答例	合計 (83名)	
1「お越しく下さい」	12 (14.4%)	12 (14.4%)
2「おいでください」	4 (4.8%)	4 (4.8%)
3「いらっしゃってください」	9 (10.8%)	9 (10.8%)
4「いらしてください」	20 (24.1%)	
「いらしていただけますか」	3 (3.6%)	23 (27.7%)
5「来てください」	20 (24.1%)	
「来ていただけますか」	13 (15.7%)	33 (39.8%)
6「たずねてください」	1 (1.2%)	1 (1.2%)
7「みえてください」	1 (1.2%)	1 (1.2%)

「いらして」の使用について

1993年と質問の形式が異なるためか、出身地の異なりからくるものか、かなり違った結果になった。1993年の学生の結果と、1996年の結果を比べると、以下のようなものである。



X軸1から5までは、調査回答の表現、6はその他として扱った。

1993年の調査は「お越してください」「おいでください」という敬意の高い表現で答えていたが、1996年はいわゆる敬語動詞を用いない形を、「来てください」24.1%「来ていただけますか」15.7%、合わせて39.8%が使っている。「お越してください」「おいでください」の敬意の高い表現使用は、1993年の学生82.4%から1996年は29.2%に減っている。全体を敬語動詞に改めるのではなく、後ろの補助動詞部分だけを敬語に変えるという簡単な敬語表現を選ぶ傾向になってきている。

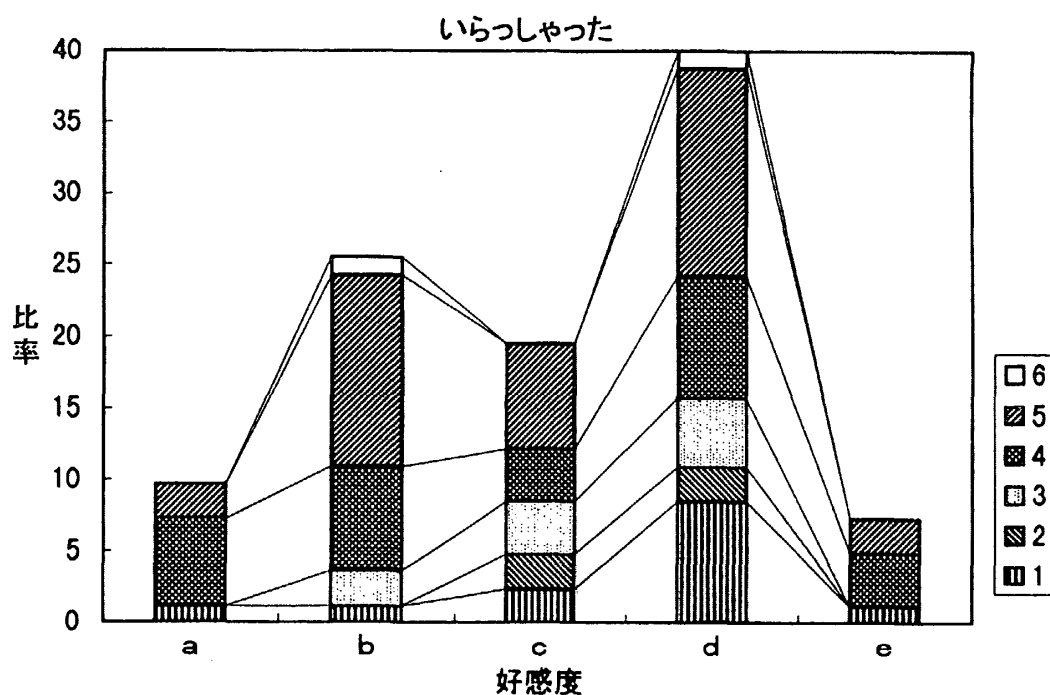
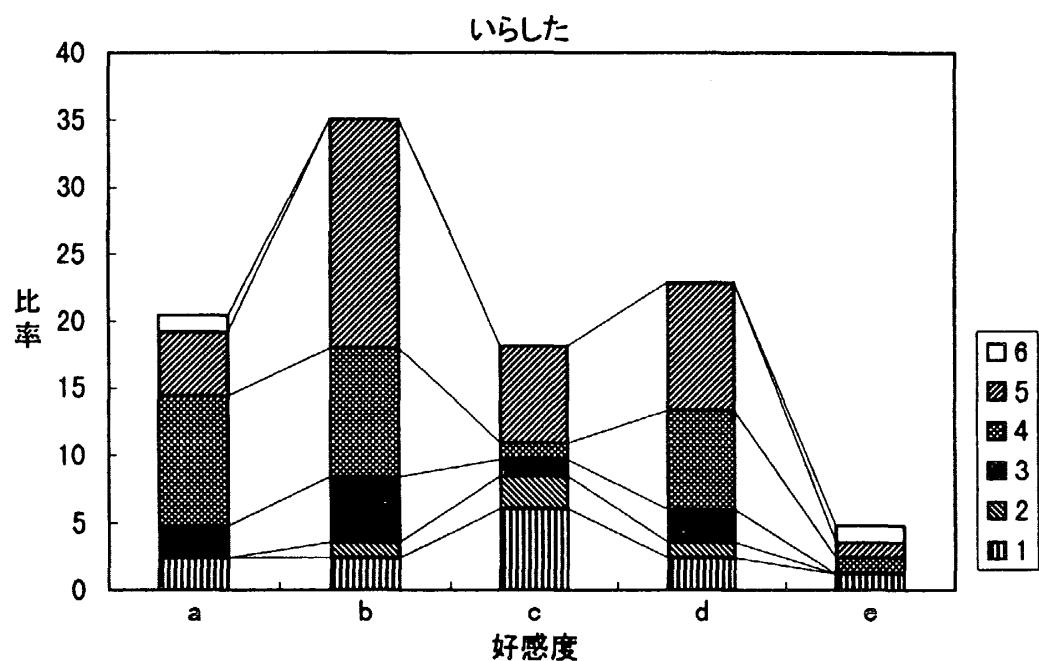
「いらして」については、使用率が確実に増えている。1993年の学生は3.8%にすぎないが、1996年では27.7%にのぼる。一方、「いらっしゃって」は1993年の学生は9.6%が1996年では10.8%でわずかな伸びにとどまっている。同じ「いらっしゃる」を終止形もつ「いらっしゃって」「いらして」ではあるが、「いらして」だけが使用を伸ばしていることがわかる。

3. 「いらっしゃった」「いらした」使用好感度について

使用例からは、「いらして」が着実に使用を伸ばしていることがわかったが、「いらっしゃった」「いらした」の使用に対する好感度はどうかを1996年目白学園女子短期大学で

の敬語調査から、分析してみる。

「いらっしゃった」「いらした」を用いた文例についてどのような印象を持っているのかを尋ね、a 完璧な表現である、b まあ適当である、c 普通、d ちょっとおかしい、e 非常におかしい、のなかから一つ選んでもらった。それを、前節の「来てくれ」を1から6のどれで回答したかを、全体の比率にしグラフに示した。



「いらした」を「bまあ適当である」が全体の35%にのぼる。さらにa b cを好ましい表現とすれば、82%ほどが好ましいと感じているということになる。

「いらっしゃった」は、「dちょっとおかしい」が全体の40%にのぼる。また、a b cは合わせて53%ほどで「いらした」の82%とはだいぶ異なる。特に「来てくれ」を「お越しくください」と答えたものが「ちょっとおかしい」と感じている。

「いらした」のほうが、「いらっしゃった」よりも馴染みがある、好ましい表現と思われることがわかる。「いらっしゃってください」を「いらしてください」に直していくということにも納得がいくような結果である。しかし、「来てくれ」を「いらして」にして答えたものがすべて「いらした」を好ましいとしたわけではなく、「dちょっとおかしい」としたものも全体の7.6%ある。「いらして」と「いらした」では使用意識が異なるのかもしれない。

4. おわりに

以上、3からは「いらして」が使用を伸ばしていること、4からは「いらっしゃって」よりも「いらして」の方が好ましい、あるいは馴染みのある表現と思われることがわかった。

現在、「いらせらる」から変化をした「いらっしゃる」は次のような活用をしている。

未然形「いらっしゃら」連用形「いらっしゃり・いらっしゃい・いらっしゃっ(て)・いらし(て)」終止形「いらっしゃる」連体形「いらっしゃる」仮定形「いらっしゃれ」命令形「いらっしゃい」。連用形の原形はあまり使用されないが、二つの音便形と「いらし」があるラ行五段活用の特異な動詞ということになる。

連用形は活用形のなかで使用率が一番の多数形である。その多数形が多様なうえに、他の活用形と釣り合わない連用形「いらし」の使用が増えているということになる。このアンバランスな状態で「いらし」の使用が増すと、他の活用形にもその影響がでてくるであろう。例えば、連体形に「いらすこと」のような例があらわれ、やがてサ行五段動詞のような活用がでてくる可能性もある。

(注) 八代目三笑亭可楽(明治30年1月、東京・下谷黒門町生まれ)の「笠碁」では囲碁敵の男性同士の会話中に「いらして」がたびたび聞かれる。[昭和28年以降39年までの文化放送有楽町ビデオホールライブの録音テープによる]